

縄文柴犬は社会的貢献ができるか？

岩手県立博物館学芸第一課長 NPO法人縄文柴犬研究センター理事 藤井 忠志

2012年度は、いよいよシカ問題に本腰で取り組もう！と考えていたときだった。これまで人類が経験したことの無い大きな揺れと大津波により、三陸沿岸が壊滅状態に瀕した東日本大震災（2011年3月11日）が発生したのは。。。

それがため、シカ問題は影を消し、東北の姿は三陸復興にのみ傾いている。

かくいう筆者も間接的被災者で、岩手県下閉伊郡山田町で命からがら逃げ延びた義母を抱えて、悪戦苦闘の日々を送っている。

専門は鳥類生態学の『日本産キツツキ科鳥類の生態研究』である私は、博物館学芸員という仕事柄、企画展で何をテーマとして取り上げるか？で悩んでいた。部門内会議で出てきたのが、「シカとクマ」。大型獣類といかに共存すべきか？という、近い将来、直面するだろう課題だった。

全くの門外漢ながら、このテーマと関わり始めたのが2008年からで、本企画展「野生動物と生きる～岩手のシカとクマ～」そのものは、2009年の秋期から始まり冬期で終了した。その間、様々な方々からお世話になり、関連する文献を片端から読みあさった。そして、岩手県では屈指のシカの生息地である五葉山大窪山にも足繁く通った。おかげでシカの生態のみならず、シカの消化機能、繁殖力の凄まじさなど想像を絶する生命力であるシカを知ることとなった。案の定、以下のように企画展最中にシカの生息情報が、県内外から多数、寄せられた。

ひとつめは岩手県がニホンジカの絶滅を危惧するあまり、『北限のホンシュウジカ』として狩猟の際には犬の導入禁止・オス鹿の禁猟・メス鹿の禁猟・保護区

の設置など完全保護をしたがため、1970年代を境に今度は逆に激増し始めた。五葉山界限の受容個体数が2,000頭に対し 生息推定個体数が5,900頭と約3倍であること。

ふたつめは世界的にも古く希有な地質構造・特異な植生構造である早池峰山に、シカが侵入し始めていたこと。

3つめはその余剰個体が北上・南下・西方への進出をしていることと同時に、北海道からエゾシカが津軽海峡を渡って（泳いで）下北半島周辺に上陸していることなどである。

ひとつめに関して、2013年現在の岩手県内の推定個体数は11,100頭である。会誌20号でも触れたが、シカは黙っていると1年で約2割ずつ増加するため数式上は $1.2^n \times \text{母集団}(n; \text{年数})$ となり、4年あまりで倍増する。事実、たった5年で倍増している。

ふたつめは、ハヤチネウスユキソウ *Leontopodium hayachimense* はじめ世界的にも貴重な植生が壊滅状態に陥り、今、岩手県では専門家によるプロジェクトチームを立ち上げ、その対策会議を行っている。

3つめは種レベルでは同一ながら、亜種段階で異なるエゾシカ *Cervus nippon yezoensis* とニホンジカ *C.n.nippon* の交雑種に近い将来、出現することなど。さらについ最近では、私たちが専門に通っているクマガラ生態調査地で、日本初の世界自然遺産・白神山地内にまでシカが侵入し始めているという報告がもたらされている。いまやシカ問題は東北はおろか、日本全国、手をこまねいているだけではいられない社会問題と化している。

そこで、天敵であるニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* 不在のため、アメリカのイエローストーン



逃げる非繁殖期のオス集団（2008.08.23）岩手県大窪山にて



非繁殖期のメス集団（2008.08.23）岩手県大窪山にて



◀ ヌタ場で泥を塗る繁殖期のオス
(2008.10.18) 岩手県大窪山にて



雄グマの成獣⇒
(2007.09.16)
岩手県大窪山にて
photo by
Yoshihiro Sato

で成功したカナダ産オオカミの放獣やハンターに頼るといふ方策も打ち出された。しかし、前者はアメリカで成功したからといって、日本という狭い国土で成功するとは限らないこと。後者は、ハンター資格をもつ被災者が三陸沿岸地域に多かったほかに高齢化によるじり貧状態で、毎年 of 許可申請など諸手続き上の煩雑さもあり、効果ある対策がないのも実情である。

筆者は、これまで実際、シカやクマの狩猟にたずさわってきた岩手を代表する名ハンター数名から話を伺ってみた。ハンター曰く。人間より、犬がいたほうが狩猟の効率がぐーんとあがること。犬1頭は、勢子20人分に相当すること。犬の種により、向き不向きがあることなど。そのような意味で、20号で紹介した6年間を費やし、クマの被害を未然に防いだ秋田・岩手両県での縄文柴犬の実験例はわずか3例で、試験的導入とはいいいながら、縄文柴犬の適性を証明したのではなかろうか？

五味(2012)の「縄文柴犬ノート」によれば、縄文柴犬とは「縄文時代の犬とは異なるが、それと相似する犬」「およそ1万年前の原型に近い形態を残している犬」と定義されている。つまり、縄文時代の犬との相似性・原種性という観点から『縄文柴犬』と呼び、

保存すべき我が国の文化遺産である。と同時に、シカにとってニホンオオカミという天敵不在の今日、オオカミに匹敵し、飼い主だけに従順でありながら潜在する野生の本能を持ち合わせている動物という観点で、その存在がますますクローズアップされなければいけない。そのような意味で、人間社会に貢献できる可能性のある縄文柴犬が、今、求められ、重要視されることは疑いないと考える。

従って、縄文柴犬がその種を維持し続け、これまで以上に繁殖活動を行うことが必要不可欠となる。ただし、犬の個体差による性質等も多様であるため、どの縄文柴犬が狩猟やその地域での人との協働犬として適性であるか否か？や、繁殖などを含め、その認定に関する諸問題については、緊急を要する重要課題となるであろう。

縄文柴犬研究センターの今後のあり方や、発足したばかりの「繁殖センター」の活動は、ますます重要な意味を持つことになるろう。

文献

五味靖嘉(2012) 縄文柴犬ノート 正しい犬の見方・考え方. 精巧堂出版, 大仙.